

## 医学と道徳律

YouTubeで、R.ドーキンスが無神論を説く講義や討論を見ていて、関連動画から、キリスト教を信仰する二人の科学者にたどり着くことができた。

一人は、ヒューマン・ゲノム・プロジェクトのリーダーとなり、その後は米国NIH研究所長を長く務めているフランシス・コリンズである。彼自身、かつては無神論者であったが、C.S.ルイスのMere Christianity（和訳では「キリスト教の精髓」）に触れ、揺るぎない信仰が芽生えたという。もう一人はオックスフォードの数学者で、著書にGod's Undertakerがあるジョン・レノックスである。激昂して宗教を否定するドーキンスが、彼らとの対論のなかで、徐々に顔色を失っていくのがわかる。コリンズもレノックスも、科学が観測し解明できることには限界があり、神の存在証明は科学の可能性の外にあり、信仰と科学は両立すると主張する。私も、彼らのように、科学とキリスト教とを矛盾無く信じることができる。

一方医学は、科学の手法を用いるものの、それが倫理的であることを前提とする人の営みである。出生前診断、遺伝子操作、脳死臓器移植、尊厳死…に見るように、医療技術の進歩は、神から与えられた道徳律としばしば衝突する。道徳律のすべてが満たされないときに、何を優先するかを選ばざるを得ないことがある。

この衝突は、キ医連が避けては通れない問題である。少なくともここで言えることは、命とは何か、命に違いはあるのかと懊悩する私たちの意識のなかに、神の存在が現れているということではなからうか。

（神庭 重信 第68回J CMA総会会長）